

日本戦闘の者



荒谷 卓 (あらや たかし)
 生年月日：昭和34年秋田県出身
 略歴：昭和53年東京理科大学、陸上自衛隊に入隊、第19普通科連隊、調査学校、第1空挺団、第39普通科連隊、陸上幕僚監部防衛部、防衛局防衛政策課戦略研究室等に勤務。平成16年特殊作戦群初代群長に就任。平成20年依願退職(1等陸佐)。海外留学：ドイツ連邦軍指揮大学及び米国特殊作戦学校。
 平成21年9月～30年10月、明治神宮武道場至誠館館長。
 平成30年11月三重県熊野市に「国際共生創成協会 熊野飛鳥むすびの里」設立、代表を務める
 著書：『戦う者たちへ』『サムライ精神を復活せよ』『特殊部隊vs.精鋭部隊—最強を目指せ』並木書房／『自分を強くする動かない力』三笠書房
 熊野飛鳥むすびの里のHPアドレス
<https://musubinosato.jp/>

044



2023年9月15日、クリミアの首都シンフェロポリ駅の写真にて。

当時、ドイツに占領されたポーランド領土の東をロシアに割譲し、ドイツの領土のオデル川より西をポーランドに併合するというのがルーズベルトの考え

であった(実際にそうなった)。この会談を要請したチャーチルとルーズベルトの思惑は、次のようなものである。チャーチルは、第1次世界大戦後、衰退していく英国が、それまで世界中で略奪した植民地を自国の国力では防衛できなくなることを見据え、新たな世界ルールを確立して英国の権益を保全しようと考えていた。そのため、大西洋憲章に盛り込もうとしていた「関係国の国民の意思に反して領土を変更しないこと」を、新たに創設する連合国(国際連合)憲章において実効性を確保しようと考えていた。また、ルーズベルトは、国際連合の創設とロシアに對日参戦させることが主要な目的であった。そして、実際に彼らの思惑通りの合意内容が第2次世界大戦後の世界の分割体制、いわゆる「ヤルタ体制」として合意された。その主要なところは、以下の通りである。

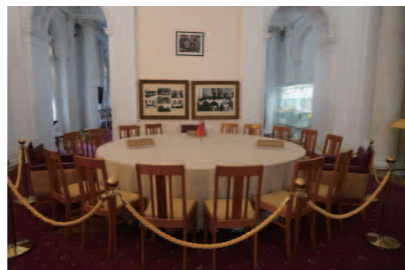
- 連合国会議(国際連合)の創設
- ヨーロッパの管理
- ドイツの分割管理
- ポーランドの分割管理
- ユーゴスラビアの内政
- 南東ヨーロッパの管理
- イランの取り扱い
- 戦後の世界秩序について
- ソ連の對日参戦と日本の分割管理等々

この中で、イランの問題も議論されたように、英国(後には米国)の中東管理において、キーとなるのがイランの存在で、そのための対抗拠点としてイスラエルが建国されるわけであり、今のパレスチナ・イスラエル問題は、この英米による中東支配が根本原因である。

日本に最も関係するのが、ソ連の對日参戦と日本の分割管理の問題だ。ルーズベルトは、日本の真珠湾奇襲攻撃があると同時に、ソ連のスターリンに對日宣戦布告を要請していた。しかし、スターリンは、その要請をずっと拒否しており、ヤルタ会談においても、「ソ連国民は、ソ連の生存を危機に陥れたドイツに対する戦争ははっきり



16日、ヤルタ周辺観光。ここは皇帝ニコライ2世が建設したりヴァディア宮殿にて米英首脳3者が「ヤルタ会談」を行った場である。



17日、クリミアはアブラウ・ドゥルソンのシャンパン工場で生産されるシャンパン工場の見学と試飲をした。

と理解しているが、少なくとも最近何も紛争を起こさなかった日本に対してなぜ戦争を始めるのか理解できただけであろう」「日ソ間には中立友好条約がある」として對日参戦を当初は拒否していた。しかし、ルーズベルトから「(對日参戦すれば)ソ連は樺太、ハルビン、大連、旅順、千島列島を受け取るであろう。また、温暖な海への出入路、満州鉄道が与えられるであろう」と熱烈な要請を受け、チャーチルからは「ドイツが對ソ宣戦布告をし、実際にロシア領土を侵略したことにより、ドイツの同盟国たる日本は既に中立条約を破っている」と説得された。最終的には、スターリンが米英代表に「約束を文章化するならば合意する」として、米英首脳3者のサインが記された合意文章をもって、對日参戦に踏み切る。その調印文書には、次のように記されている。

ドイツ降伏2〜3ヵ月後、ソ連が連合国側に組して對日参戦に参加する

1904年に日本の背信的攻撃(日露戦争)によって侵害されたロシアの旧権利を回復する

千島列島はソ連に引き渡される
 ソ連は中国を日本の軛(くびき)から解放するため軍隊によって支援すべく、ソ連と中国との友好同盟条約を締結する用意(米国が仲介)がある事を表明する

そして、ソ連の對日軍事作戦には、以下のような米国の軍事支援が約束され実施された。

アメリカ空軍基地をコムソモリスク、ニコライエフスク、アムール川流域に開設し對空対地攻撃支援 ※「クレムリンの洋服屋による仕立ての制服の着用(米軍人がロシア軍人になりすますこと)」が条件

海上輸送上陸侵攻作戦「プロジェクト・フラ」支援

米海軍艦艇無償貸与(掃海艇55隻、上陸用舟艇30隻、護衛艦28隻等、計144隻)、アラスカ州コールドベイ基地において、ソ



18日、クリミア南東部の「ニコライ皇帝の秘密のビーチ」と呼ばれる観光リゾート地にて。



連兵約12,000名に艦艇・レーダの習熟訓練、米軍舟艇で上陸侵攻し千島列島を占領つまり、満州及び千島列島に対するソ連の軍事侵攻は、実際には米軍の提案による、米ソ連合軍による侵略であった。それが、現在の北方4島問題につながってくる。だから、北方領土問題の起源はヤルタでの合意であり、もし、これが破棄されるのであれば、関連して、ポーランド国境もドイツ国境もすべて白紙化されかねない問題ということだ。

話をもとに戻す。このヤルタのすぐ隣にあるセバストポリというロシア黒海艦隊の管理する敷地に、22日にウクライナからのミサイル攻撃があったことが、ロシアのテレビで放映されたので、サーシャさんに「大丈夫か?」と連絡をしたが、「ただの空き地にミサイルが落ちただけです。全く問題ありません。」とのことだった。日本に帰ってきて日本の報道を見てびっくりしたのは、「この攻撃でロシア黒海艦隊の司令官が死亡した!」とか、「死んだはずの司令官が翌日の会議に出ている!ロシアの陰謀か?」といった内容だ。こいつら、嘘をつくにもほどがあるだろう。そもそも、ロシアでは、テレビが40局以上あって、ニュース専門のチャンネルでは、毎日、ロシア軍とウクライナ軍のリアルタイムの状況が報道され、このようなミサイルやドローン攻撃もマップ上でわかり易く表示されている。テレビ以外にも、国営メディア『スプートニク』日本版で4〜5日遅れではあるが戦況が細かく報道されている。これほどわかり易い報道を、なぜ日本のメディアは紹介しないのか。しかも、いかにもウクライナ軍が優勢なような報道ばかりだが、軍事の事が少しでもわかっているならば、ウクライナ軍がロシア軍に勝てるはずがないことぐらい常識だろう。そんなことが出来るのなら、ウクライナより強い日本は、日米同盟などなくともロシアにも中国にも勝てることになるよな。言っていることが矛盾を超えてはかかっている。また、ロシアは報道統制が強烈で、国民は言えないと言えないような印象を与えているが、それを言うなら日本の事だ。例えば、俺がロシア訪問している間に国連総会が開催されていた。ロシアのテレビでは、毎日その総会の議論がほぼ全て放映され、もちろん、ゼレンスキーのスピーチも全部放映されていた。つまり、

ロシアにいれば、世界のいろいろな論調が普通にテレビを通じて一次情報で確認できる。では、日本ではどうか。国連総会で何が議論されていたのかを国民は知っていたらどうか。ロシアのラズロフ外相のスピーチでは聴講者が満席だったが、ゼレンスキーでは半分以下、岸田総理に至ってはほぼ空席。この様な世界の趨勢を日本人はちゃんと認識できているのか。できていないとすれば何故なのか。おそらく、世界有数の言論統制がされているわけだ。ロシアのことが知りたければ、ロシアに行って見てきたらいいじゃないか。一般の観光客が行けるのだから、報道に責任を持つ者は、当然ロシアに行って事実を確認して報道すべきだろう。

翌日の17日は、クリミア南東部のビーチに連れて行ってくれた。クリミアはシャンパンとワインの産地で、特にこの地域のアブラウ・ドゥルソンのシャンパン工場で生産されるシャンパンが有名だそうだ。そこで、2時間ほどシャンパン工場の見学と試飲をした。その後、「ニコライ皇帝の秘密のビーチ」と呼ばれる観光リゾート地にボートに乗って上陸、2時間ほど海水浴を楽しむ。このビーチだけでなく、黒海沿岸の各ビーチでは、海岸でイルカと遊ぶので人気だ。子供から年寄りまで、多くの人がのんびりくつろいでいた。日本でのクリミアの報道を見ていたら、全く信じられない光景だ。豊かで平和でくつろげるリゾート地、これが実際のクリミアだよ。

滞在中、サーシャさんに、今のウクライナについて尋ねてみると、即座に「ナチズム!」と怒りを込めた返事が返ってきた。彼自身は、ウクライナの政府転覆以前にクリミアに移住したので安全だったが、ウクライナの親族や知人は、現政府による虐待やナチ組織の攻撃を受け、ほとんどがドンバスやロシアに避難したそうである。何しろ、ロシア語を話しただけで捕まるといふのだから異常だ。ドンバスに残った人たちは、今でも欧米諸国がウクライナに支援した武器を使った砲撃やミサイル攻撃があるそう、で、「こんなことをして何を考えているんだ! 一体何をしたいんだ!」と心配し、ウクライナが一刻も早く、元通りの正常な国になることを強く望んでいた。



20日、サーシャさん家族との写真。

国際共生創成協会 熊野飛鳥むすびの里
 代表：荒谷卓



045